

# 木田先生の思い出

2008年8月

里村雄彦

個人的にお話しし始めたのは木田先生と私がともに気象研究所に在職中の時ですが、ここでは私が京都大学に移籍してからの先生の思い出を述べさせていただきます。

教授ご在任中は、学内では教室主任や専攻主任、身を削るような全学学生懇話委員をはじめ多くの委員に就任され、学外でも日本学術会議大気・水圏科学研究連絡委員会委員長を初め多くの重職を兼任されておられました。しかし、このような多忙な毎日を送られていたなか、木田先生を指導教員として多くの若者たちが優秀な研究者として独り立ちを果たしています。院生たちと共に研究された分野は、すぐに思いつくものだけで、木田先生のご専門に近い全球炭素循環モデル開発、数十年周期変動のメカニズムに関するデータ解析、精緻な地表面過程を取り入れた局地循環モデルの開発と応用など、幅広いものでした。

また、京大に移籍後も気象研究所時代の部下であった研究者への指導は続けておられ、その成果は、木田先生発案のスペクトルナッチング法を用いた領域気候モデル開発とその応用に関する学位論文や生態系と相互作用する陸面過程を改良・実装した領域気候モデル開発とその応用に関する学位論文として、実を結んでいます。

このように学内外の広い範囲に及ぶ多くの若者を指導される際の先生の方針は、彼らの自発的学習・研究を重んじるものでしたので、ある意味、非常に京都大学理学的な指導方針であったのではないかと思います。

先生は高等教育を東京で受けおられているにも関わらず（ご出身は京都ですけれど）、辿り着いた先は京大理学部でよく口にされる自主性重視の指導というのは、日々学生・院生に接する現任教員の私は興味深くかつ示唆に富むものと感じています。

セミナーなどでは、木田先生は穏やかなほほ笑みと共にコメントを出され、そのほとんどは学生の努力を認め励ます方向のコメントでした。もちろん、必要な時には勉強不足をきちんと指摘されましたが、それでも大抵の場合は声を荒げることもなく穏やかに諭される口調であったと記憶しています。また、時に意表を突くジョークも口にされ、周りにいるものは一瞬虚を突かれますが、それはそれで若い人たちは緊張をほぐされたのではない

でしょうか。

学生との交流という点でも、いろいろと腐心されていました。学生間や学生と教員との意思疎通を図るため、3時に皆で休憩して気軽に話す習慣をつけましょうと提案され、しばらく実行されていました。また、木田先生はアルコールを飲まれなかったのですが、それでも花見や忘年会など研究室公式コンパにはほとんど欠かさず出席されるだけでなく、卒業祝い昼食会も自ら提唱して開催されていました。学生たちには敷居の高いお店での卒業昼食会は、卒業生たちの良い思い出となって残っているはずです。これらのコンパでもやはり座を支配することなく、かといって白けるでもなく、穏やかな話の輪が先生の回りに存在したように思います。その雰囲気は、先生独特のものではなかったでしょうか。

毎年学生は入れ替わります。退職後半年ほどで亡くなられたこともあって、木田先生から始まったこの研究室でも先生を直接知らない院生たちが少しずつ増えてきました。私は木田先生と比較されるべくもありませんが、先生が研究室を去られた後、先生が礎を築かれた研究室の特色を愛しつつ、さらに学生・院生が伸び伸びと自己を実現して研究が発展するような研究室になるようにしたいものだと思っています。



木田秀次 先生



木田研究室 春の花見 (2004年)